Machine Translated by Google

(1891-92)

	: Japanese : : 2010-03-09 (Ja): (En): : , : :
URL	http://hdl.handle.net/10291/7770

Machine Translated by Google

明治大学大学院紀要
第26集 1989.2

パルヴスの飢饉論（1891-92年）

1.「労働者民主主義論」の底流

PARVUS UND DIE HUNGERSNOT IN RUßLAND, 1891-1892
-EIN BEITRAG ZUR ANALYSE DER GRUNDLAGE SEINER "ARBEITERDEMOKRATIE"——

博士後期課程 政治学専攻61年入学
西川 伸一
NISHIKAWA, SHIN'ICHI

はじめに

1891年から92年にかけてヨーロッパ・ロシアを襲った大飢饉は、近代ロシア史上最悪の飢饉と言われている。当該地域で飢餓線上をさまよった住民は、実に3千万ないし4千万にものぼったという。

いうまでもなく、この大飢饉が、当時のロシアの革命運動にとって重要な転機となったことは、すなわち、80年代の反動の時代には、革命的行動よりも「小さな善行」が必要だとしていたミハイロフスキーら古参インテリゲンツィアは、飢饉の窮状を前に、再び人々の社会的関心を取り戻し、他方、70年代生まれの若いインテリゲンツィアの多くは、これを機にマルクス主義を信奉するようになる。その1人がレーニンであり、また、ロシア・マルクス主義者の最初の集団「労働解放団」を組織したプレハーノフであった。

ソヴィエトの歴史家ラートフによれば、「1891年から92年の全ロシア的な大飢饉は社会民主主義運動の転換をもたらし、それ以降、社会民主主義運動は急速に発展する。」[1] 大飢饉の息吹を吹き返した革命勢力のエネルギーは、やがて1905年革命で頂点に達するのである。

この革命において「労働者民主主義論」なるロシア革命の構想を示して注目されたドイツ社会民主党（以下SPD）員パルヴス（本名イスラエル・ガリフォンド、1867-1924年）[2]についても、前記の大飢饉は無視できない。というのは、90年代、その左派の論客として名を馳せた彼のSPD論壇における活躍も、まさしくこの大飢饉の分析に始まるからである。白ロシアのユダヤ人家庭に生まれた彼は、その頃、すでに留学を経てスイスおよびSPDについてドイツを見聞したばかりであった。しかも彼の飢饉分析には、のちの「労働者民主主義論」へと結実する萌芽的な論点と彼の革命に対する基本姿勢が看取されるという[3]。

「労働者民主主義論」については以前言及したことがあるので[4]詳しくは繰り返さないが、その骨

Machine Translated by Google

1. 大飢饉の原因をめぐって

実際にロシアの大飢饉は、どの程度の規模だったのか。統計によれば、ヨーロッパ・ロシアのうち特に被害のひどかった16県の総収穫高は、1890年には180百万チェトヴェルチ（1チェトヴェルチ＝209.21リットル）近くあったのに対し、91年には78百万チェトヴェルチと激減している。ヨーロッパ・ロシア50県全体を見ても、収量は過去10年間の最低を記録し、中でも農民の主食ライ麦の落ち込みが目立った[6]。

こうした大凶作の直接の原因は、1890年秋から91年夏まで続いた天候不順に帰せられるが、根本的な原因には、農奴解放の必然的帰結とも言える農民経営の疲弊があげられる。周知のように1861年の農奴解放令によって、かなりの農民は解放前の耕地を領主から「切り取り」という形で狭められた上、その分与地の所有権を得るためには高額の買い戻し金を支払わなければならなかった。しかも土地は農村共同体にまとめて譲渡され、買い戻し金の支払いに対しては共同体の連帯責任制がとられたのである。これらの点から、農民は終始ゆとりがなく、ぎりぎりという状態に置かれていた。さらに当時の蔵相ヴィシネグラツキー（ウィッテの前任者）による穀物輸出の奨励政策が、農民の貧困に追い打ちをかけた。彼は財政安定と金本位制の確立を目指して、農民の犠牲において穀物の飢餓輸出を強行したのである。穀物はロシアの主要な輸出品目であった。「十分に食べてしまわずに輸出しよう」とのスローガンに、彼の考えは如実に示されている[7]。

以上の事態を受けて、ロシアのいろいろな批判的知識人たちは、飢饉論争を展開する。争点は、飢饉の原因たる農民経営の疲弊をめぐるものだった。ナロードニキはそれを、農業の資本主義的発展の危機的結果としたのに対し、マルクス主義者は、農業における資本主義化の遅れの帰結とみなしていた[8]。

若きルヴスがSPDの機関紙に一連の大飢饉に関する諸論文を発表していく背景は、かくの如しであった。彼は後年こう述懐している。「1892年に私は、飢饉に関する一連の論文を著した。そ

He defined the Russian revolution as a proletarian socialist revolution, called for the dictatorship of the proletariat and provided its support.
Furthermore, as the Western European revolutionary movement subsided, he also began to take on a socialist
In a sense, this was the precursor to Trotsky's "theory of permanent revolution."
And Russian Marxists, inspired by Parvus's argument
While the rapid progress of capitalism began to be developed in the "debate on the development of capitalism" (Takahashi Kamekichi)
This meant a re-examination of the premise of "discontinuous two-stage revolution."
The purpose of this paper is to analyze Parvus's work on the famine in Russia, which was the trigger for the Russian
The purpose of this book is to explore the "labor theory of value" in the context of Marx's theory of value. It is
It is only by clarifying Parvus's understanding of Russia that we can understand the process by which Parvus's
How big was the Great Russian Famine? According to statistics
The total harvest of the 16 hard-hit provinces was 180 million chetvert (1 chetvert =
209.21 liters), but by 1891 it had dropped sharply to just 78 million
In the 50 provinces of European Russia as a whole, the harvest was the lowest in the past 10 years, and the drop in the staple rye crop was particularly noticeable.
The direct cause of the famine was the bad weather that continued from autumn 1890 to summer 1891, but the fundamental
The main reason for the famine was the exhaustion of peasant farming that followed the emancipation of the serfs in 1861.
Due to the Emancipation Edict of 1861, many peasants had their land cut off by the former landowners
In order to acquire ownership of the allotted land, a redemption payment had to be paid for the land.
The land was transferred to the commune, and the redemption payments were collectively borne by the commune.
These factors meant that farmers were rarely able to make ends meet.
The grain export encouragement policy of Vyshnegradsky (Witte's predecessor) was a grain export promotion policy that further impoverished farmers.
to stabilize the budget and establish the gold standard, he forced farmers to export grain, starving them.
Grain was Russia's main export item.
His ideas are clearly expressed in the following passage:
In response to this situation, so-called critical intellectuals developed a debate on the famine. The point of contention was
the reason for the decline in peasant farming, which was the cause of the famine. The Narodniks saw it as a case of agriculture falling behind capitalism.
While Marxists saw it as the result of the slow capitalization of agriculture
The background to Parvus's publication of articles on the Great Famine in the SPD's official journal is as follows.
He later recalled: "In 1892, I wrote a series of essays on the famine.

Machine Translated by Google

の中で私は、ロシアにおける産業と革命運動の急速な発展を予想した。」[9] 彼の飢饉論の基調はここにある。特に1892年6月、『アテネウム』誌に4回連載の「ロシアの状態」は、彼の代表的な飢饉分析と目される。弱冠24歳で物されたこの論文は、「あきれるほどの造詣の深さ」によって読者の注目を惹いたという[10]。その冒頭、彼は次のように述べている。「ロシアの大飢饉を天候不順に帰する見解を、「ありふれた、というより西欧の観察者の見解」だとして退け、その背後にあるロシアの農業構造の大規模な変容の究明こそが必要だと説いている。そして、この究明に「ロシアの状態」の課題を置いた[11]。それでは、彼は飢饉の原因をいかに捉えていたのだろうか。

まず、レーニンは、その年（92年）の収穫予想から検討を始める。彼は前年の凶作がその年の作況に及ぼす影響を次のように説明する。最も目立つ影響は、播種用穀物の極端な不足である。それは冬穀、春穀とも同様であり、冬穀については前年秋の天候不順も伴って、収穫を断念してしまった耕地も少なくない。また春穀については耕地の半分も播種されないのが現状だ。その上、貴重な農業労働力であり、厩肥の供給源でもある役畜の激減は、農民に深刻な打撃を与えた。役馬なし農の増加が各地から報じられている。（当時のロシアでは役馬なしの農は完全な農業経営喪失者を意味した[12]。）生き残っている役馬も生ける屍にすぎない。これでは施肥量の不足と農作業の停滞は必至だ。しかも当の農民は、「ロシアの半分は病床に臥している」と見えるほど疲弊の極にある。とてもひとかどの仕事など期待できない。それゆえレーニンは次のように断ずる。「今年の収穫は、たとえ気象条件が望ましいものであるとしても前年の収穫よりずっと悪い結果になるに相違ない」と[13]。

かかる考察を踏まえてレーニンが強調するのは、飢饉が偶然ではなく、農奴解放後30年にわたって蓄積された弊害の必然的な産物だという点である。彼によれば、解放令によって農民に提供された分与地の狭隘さ、重税、昔ながらの耕作方法（三圃制）、耕地の細分化が「飢饉の土壌」として指摘できるという[14]。すなわち解放された農民は、狭い耕地と生産性の低い三圃制に拠って、買い戻し金、人頭税等の支払いを強制されてきたというのである。実際に、そのため当時の農民は常に飢餓の淵に瀕していた。そして彼らがこの悲惨な状態から抜け出すには、穀物の増産以外になかったのである。だが農業技術の向上はほとんど見られず、その方法は耕地の拡大という形をとった。かくて、休耕地、牧草地、森林は耕地に転用され（農民の分与地には耕地だけでなく、畳敷地、牧草地、場合によっては山林を含むこともあった）、略奪式農耕が行われたのだった。土地の状態にかまわず収穫増が図られたのである。しかも、80年代の国際的な農業危機による穀物価格の下落が、農民の穀物増産に拍車をかけることとなった[16]。

レーニンは、こうした農民の努力の否定的側面に着目していた。彼の見るところ、森林地帯の無謀な耕地化は、数百万デシャチーナの森林を根こそぎにして、自然環境を破壊した。砂風が砂漠を吹き荒れ、熱波や霜が作物を直撃し、また河川は干上がり、土地の荒廃化が進んでいる。ロシアの高官も、「ヨーロッパの穀倉であり、世界中で最も肥沃な地帯」は「不毛で惨めな荒野」に転じつつあると嘆いているのだ。ロシアはさらに、国際穀物市場において、アメリカと東インドに挟撃され劣勢に追い込まれている。結局農民は、穀価の下落を量で補うよう強いられ、それが耕地の拡大をさらに助

Machine Translated by Google

長した。ために休耕地はますます狭隘化し、土地は十分地力を養うことなく消耗していった。「そして崩壊が起きた」のである[17]。パルヴスは、農奴解放以来ロシアの農民が陥っている以上の悪循環こそ、大凶作の根本的原因とみなしていたのだ。

ところでパルヴスは、この時点ではまだ先の穀物の飢餓輸出が農民の貧困化に与えた作用については明言していない。ロシアの同時代人たちの多くは飢饉を機に「ゲンネグラツキー体制」に批判を強めていくが、飢饉の責任をウィッテやプレーヴェの政策に帰するのは短絡的な見解であり、農奴解放の長期的帰結にこそ農村の貧困の主因だとする研究もある[18]。とはいえパルヴスが飢餓輸出の矛盾を論じるのは、1897-98年、再びロシアを襲った飢饉の実態を現地で検分したのちである。その際彼は、「飢えたるロシア」の現実を「ロシアの農民の慢性的な飢餓は、ロシアの穀物輸出の対応物である」と結論している[19]。

いずれにせよ、飢饉は近代ロシア社会が孕む矛盾の集約的表現であったといえよう。パルヴスは、この飢餓が慢性化するロシア社会の行く末をどのように占っていたのか。

2. 飢饉とロシア社会

(1) 農民層の分解について

大飢饉の最大の被害者は、言うまでもなく人口の圧倒的多数を占める農民であった。従ってシア社会の行く末を見定めるためには、農民層の現状こそ把握しなければならない。パルヴスは、彼らの苛斂誅求による疲弊の指摘を経て、次の論点に至るのである。

彼はこう訴える。税の苛酷さは、常に滞納金が生じていることからも容易に察しうる。しかも、たとえ豊作であってもそれほどの滞納金によって相殺されてしまうのだ。「それゆえ長らく農民にとって収穫の良し悪しなどは、本当はどうでもよかった。また、納税のため、穀物を秋に捨て値で売り、播種のため春に倍の値で買い戻す“秋売春買”も頻繁に行われている。さらに「気違いじみた」ロシアの税制は、耕地の狭い農民ほど税負担の重い仕組みとなっている。すなわち、農民を所有耕地面積に応じて5段階に分類すれば、最上位の group 5（1.09ヘクタール）あたりの税額は99コペイカであるのに対し、最下位 group 1（0.22ヘクタール）では、実に6ルーブリ82コペイカにものぼる勘定になる[20]。

なるほど以上のパルヴスの指摘は、ロシア農村に典型的な矛盾をほぼ的確に捉えていたと言える。例えば、租税は秋に徴収され、農民は穀物を季節的な安値にあえぐ春に供出せざるを得ない。春の端境期には穀物はほとんど残っていなかった。それゆえ地域によっては、全体の8割に及ぶ農民が“春買”を余儀なくされたのである。特に中農・貧農の中には穀物購入のために借金を重ね、“債務奴隷状態”に陥りやすい者も多かった[21]。また、少ない土地を受取るにも関わらず重い「オブローク（貢租）」額が相対的に高くなる“逓減制”と呼ばれる税制は、農奴解放のきわめて異常な特徴とみなされるようになっていく[22]。

農民に対するこのような苛酷な租税収奪の結果は、パルヴスには次のように映った。「そのような

Machine Translated by Google

条件下では、小農は零落するに相違なく、土地や役畜は富農や高利貸の手に渡ってしまうのだ。…今や何が起こるのだろうか。起こるのは小農民経営の崩壊である。このことはすでに事実から明らかになりつつある。個々の農民の間に、利益を収めるためだけに、そしてできるだけ均等に割替えられた、農村共同体の所有する土地の分配が今までロシア農業の基本原則であった。こうした牧歌的な状態はもや崩壊しつつある。農村共同体は解体されつつあるのである。」すなわちパルヴスによれば、借金で首が回らない農民の借地農化、分与地の放棄、そしてその富農への集中は、農村共同体を有名無実化しつつあるという。彼は、大飢饉という先鋭的な形をとって現れた当時の農業の構造的矛盾は、農民層の分解＝農村共同体の解体をもたらすと断じたのだ。

パルヴスの共同体解体論は、解体の契機を「租税の重圧」という外側からの圧迫に求めるという点で「外的解体論」と位置づけられよう。すなわちこの論理だけでは、外側からの圧迫さえ除去されれば、共同体は回復できるという共同体＝善の見解さえ変わらなくなる恐れなしとしない。例えば、『ロシアにおける労働者階級の状態』（1869年）の著者フレロフスキーは、ロシアの農村共同体を最良の農業形態だとし、買い戻し金支払い等の外的障害が除去されるならば、ロシア農業の生産力は急速に増大し、農村共同体の経済的有利性が明瞭になると考えた。[25] そこでパルヴスの次の言葉は、ナロードニキの共同体擁護論に対する反論にもなろう。「60年代の解放政策によって、ロシアは商品生産国となり、単純商品生産から複雑な資本主義的生産への移行が起こりつつある。」[26]

説明を補足して言うならば、ロシアは、1861年の農奴解放令の公布を境に、共同体の土台である現物経済は商品経済に取って代わられ、今や資本主義経済へと移行しつつある以上、共同体への回帰は不可能だと認識していたのである。というのも商品経済は、土地の共同所有を基盤とする共同体的原理とは相容れないからである。従って上述のナロードニキの見解は、その立論の根拠を失ってしまうことになる。そもそも、一旦資本主義に足を踏み入れたからには、直接的生産者たる農民層はブルジョアジーとプロレタリアートとに両極分解してゆくというのが、当時のロシアのマルクス主義者に共通した理解であった。それは後進国ロシアにおいても例外ではない。パルヴスもこの前提に立っていた。ゆえに彼は、大飢饉が必然的な小農没落＝共同体の解体過程を急速に促進するという側面を重視していたのである。

それでは、慢性的な農民経営の逼迫はいかにして解決すればよいのか。パルヴスは、「農民を困窮から解放するためには、農耕の社会的諸条件が変えられなければならない」[27]と主張するが、彼の以上の論理構成からすれば、その方途は自ずと明らかだった。

(2) 資本主義発展に関する洞察

前に述べたように、パルヴスは1899年にあって、90年代初頭のコンドラチエフ長波は商品経済から資本主義経済への移行過程にあるとみていた。ロシア農業の再生もこの視点に立って考えられたのである。端的に言えば、それは資本主義の資本主義化であった。彼は、農業の生産性を高めるには、資本力を要する農法への転換が図られるべきだと力説する。すなわち、具体的には、三圃制を輪作に変え、厩肥で

Machine Translated by Google

はなく、別種の肥料を施し、かんがいを整え、役畜に代って農業機具を導入せよと提案するのである。

「それには資本がいる」ことになるとますます農民にとって、大土地所有者との競合は苦しくなる。

「それゆえ遠からず」農身分の最後の痕も掃きされるに相違ない。」[28)]

換言すれば、パルヴスの見解においては、飢饉によって一時的に速まる農民没落は、飢饉を克服しようとする生産性向上の努力によって、さらに加速されるのであった。従って、農民大衆の土地放棄とプロレタリア化は必至であるとされた。かくして零落した農民に残された選択は、地主、富農に労働力を販売するか土地プロレタリアになるか、それとも都市へ流出して都市プロレタリアになるしかない。どれにせよ彼らは安価な働き手になるであろう。こうした予測を総括してパルヴスは以下の如く述べている。「農民の土地は資本家の所有になり、農民自身は資本家の賃労働者になる。小農経営に取って代わるのは資本家的大規模経営である。」[29)]こうして彼は、農民層の分解とロシアの資本主義発展との間に密接な関連があることを見出す。

その際注目されたのは、小農没落によって創出される廉価な労働力であった。パルヴスによれば、

「産業は近年、保護関税の庇護下（1891年7月1日は、77年以来の関税引き上げの総仕上げとして、新高率保護関税が施行された[30)]）で成長を遂げ、今では西欧に比肩するほどになっている。しかしロシアは豊富な鉱物資源があり、またこれまで広大な版図は、地続きの植民地として、及び商品の販路としての役割を果たしてきた。その方で、産業発展の主たる妨げとなっているものこそ、労働力不足なのだ。「これらのことを考慮すれば、農民大衆のプロレタリア化が、産業界にいかに大きなはずみをつけるかは、ますます明らかになろう。」[31)]

このように、パルヴスは廉価な労働力創出に、ロシア産業発展のための役割を認めた。さらに彼は、今後15年という年限をきって、ロシアが資本主義的に「繁栄した」国となると言い切るのである。「数十万の人口を擁する大工業都市、鉱山地域での精錬所、炭坑、国中にはりめぐらされた鉄道網、国内及び全ヨーロッパへの莫大な商品流通、そして開墾、耕作、播種とも申し分なく生産、外国への一層の穀物輸出、巨額の富、低廉なる利子、都市部における賃労働者大衆と農村部における賃労働者大衆これがおよそ15年後のロシアの姿だろう。」[32)]つまり彼は、資本主義の発展によって、ロシアにおける近い将来農民革命が実現できるという展望をもったのであった。

以上の論旨から判断すると、パルヴスはきわめて楽観的な資本主義発展論を打ち出していることがわかる。彼は一国的視点で現物経済→商品経済→資本主義経済という系列を前提に、その過程で生じる農村共同体の必然的な解体、しかも飢饉による急速な解体に、ロシア資本主義発展の内的起動力を看取していたのである。確かに1890年以降、ロシアの資本主義はめざましい発展を遂げるのであり、その意味で彼は、時代の趨勢を敏感に感じ取っていたとも言えよう。その楽観的な見解は、80年代半ばにプレハーノフが、ロシアは「長期かつ困難な資本主義の道」[33)]を辿るとしたのとは対照的である。80年代は「緩慢な発展」の時代であった。ナロードニキがその時期、「ロシア資本主義没落論」を提起した背景もそこにあったのである。だが90年代にはもはやその余地はなく、ロシアのマルクス主義者たちは種々の資本主義発展論を唱えてゆく。

Machine Translated by Google

その中にパルヴスの所論を置いてみると、それがレーニンの「市場理論」と同じ視角に立っていることに気づく。周知のように、レーニンは、処女論文「農民生活における新しい経済的動向」(1893年)から大著『ロシアにおける資本主義の発展』(1899年)に至る「初期の農業理論」と呼ばれる諸論稿において、農民層の両極分解とそれに伴う資本主義的国内市場の形成を主張し、そこからロシア一国内部における資本主義の自生的発展を説いたのである[34]。なるほどパルヴスは、レーニンほど緻密な理論を展開しているわけではないが、立論の出発点はほぼ同じとみなされよう。ゆえに彼はレーニンと同様の限界を有していた。

すなわちパルヴスも、後進国ロシアの資本主義発展の特殊性を等閑視していたのだ。実際にはロシアの資本主義は、先発資本主義国イギリスの場合とは異なり、農民層をくまなく二極分解させるほどの力は持っていなかったのである。なぜなら、ロシアに限らず後発資本主義国の工業は、先進的な技術体系の移植によって、高い資本の有機的構成の下で展開せざるをえず、労働力需要は小さくてすむ。ゆえに工業が農村から都市へ吸引する労働力は微弱なものとなるからである。その結果農民は農村に滞留し、そこで生計を営まなければならない。苛酷な隷役制はここに由来するのだ[35]。ところがパルヴスは、現実の農民の搾取状況に対する深い認識にも拘らず、農民層の必然的解体という見地を崩さない。むしろ飢饉によるその急速な分解を、革命的プロレタリアートの増大という革命戦略上の視点で把握しようとしたのだろう。その理論的淵源は、エンゲルスの『フランスとドイツにおける農民問題』に遡る[36]。しかしエンゲルスの農民に対する否定的評価は、1905年革命において農民が発揮した革命的エネルギーの前に、訂正を余儀なくされることになるのである[37]。

(3) ツァーリズム論

さて、農民の零落から資本主義の発展というプログラムの未来像を導き出したパルヴスにとって次なる課題は、それがツァーリ体制と果たして両立しえるのかというものだった。彼は社会経済的分析ののち、政治的分析へと論を進めるのである。まず、ツァーリ体制の財政状態が検討対象とされた。

パルヴスの議論に入る前に、その前提として、大衆収奪の税制」と言われる当時のロシアの歳入構造に、簡単に触れておくことにする。それは、間接税偏重の構造をなしていた。すなわち、例えば1892年の費目の百分比では、直接税は9.4%にすぎないのに対し、間接税は実に49.0%にも及んでいた。しかもそのうち飲酒税は、全体の27.7%をも占めていたのである。ロシアの税制が「よっぱらい財政」と呼ばれる所以である。さらに農民の「買い戻し」支払いが7.9%であった。(解放令の規定により、農民は国家の肩替り支払いで分与地を買い戻し、一挙に対地主関係を断ちきることができた。だがこれにより農民は国家の債務者となり、立替え支払いの額を49年間にわたって政府に対して償還しなければならなかったのである。)こうしたことから、農民はツァーリズム財政の主要な担税者だったことがわかる。以上の点を踏まえてパルヴスの所説に戻ろう。

それによれば、ツァーリ体制にとって主たる税収源をなす農民の零落は、そのまま財政難を意味することになる。それは、農民が重税と凶作によって滞納金を累積させていることから明らかであ

Machine Translated by Google

るだろうが、それ以上に体制に痛手を与えたのは、飲酒税収入の激減であろう。というのも、酒類の主要な消費者でもある農民が飢饉によって窮乏化した結果、「飲酒税は必ずやごくわずかな収益しかもたらさなくなる」からである。[43] ツァーリ政府のとどめとなる、農民の担税能力はすでに涸渇していた。

しかしその一方で、国債等の利払いや軍隊の維持費等の「支出は減らすことはできない」のも事実である。ヴィルヴォの指摘にも見るように、同じ92年に歳出に占めるこれら両費目の割合は、経常合計の6割程度にも達していた。[44] かくて財政再建が最大の懸案となったのである。彼は以下のように語っている。借款は所詮、急場しのぎにすぎない。結局、「政府は社会の経済力を担っている階級に頼らねばならない」のだ、と。これまで農民層に頼ってきたツァーリ政府にとって、経済力をますますその手中に収めつつある資本家階級を頼りとすることになろう。従って、ツァーリ政府のとる政策は、「資本の目標に応じたものになる」ことであろう。[45] 資本の利害が全てに優先され、絶対主義は資本主義の下僕になる。ここにブルジョワジーの唯一の活路があるのだ、と。これが、ツァーリ政府の財政状態の検討から導き出された回答だった。

またパルヴスは、絶対主義体制を支える両輪である常備軍と絶対主義官僚についても、分析を加えている。彼の観察するところ、この両者においては双方とも弛緩しきっていた。すなわち、軍律の厳しいことで知られる陸軍といえども、待遇、食事等に不満が積もってきており、特に下級将校は蜂起となれば、兵卒の側にくみする、兵士の忠誠心も揺らいでいる。そのため蜂起に際して政府は、その他の軍隊を差し向けることが困難になろう。また官吏層においても同様である。彼の最大の関心事は、俸給が滞りなく支払われるかどうかであった。もしこれら官吏層が革命に加わるのなら、それは彼らが従来の生活の糧の支払いがもはや期待できないことをはっきりと見切りをつけている何よりの証である。ロシアの絶対主義の死は、すでに官吏層にまで「広く気づかれるほどの悪臭を放っている」のだ。[46]

資本家の従属、軍・官僚の離反、これらすでに述べたように、収穫以上の税を課せられた農民のいつ爆発するとも限らぬ不満、かかる事態を踏まえてパルヴスはきっぱりと断言する。「絶対主義はもはやその命脈が尽きている。ロシアは憲法を獲得するのだ。」彼は帝政から立憲体制への移行を予想したのだ。だが問題はその内実にあった。パルヴスは、立憲制の担い手となるべきブルジョワジーの限界を指摘する。彼らは民主的憲法（民主体制）を望まないであろうというのである。つまり民主的憲法の基本をなす普通選挙権、出版・言論・集会の自由の実現など、彼らの望むところではない。それどころか、政治権力が人民大衆の手に移りかねないからだ。それゆえ「ブルジョワジーが必要とする程度の自由は、ロシア帝国においても存在する。すなわち価格表や宣伝パンフレットを印刷し普及する自由、株式会社を設立し、また株主総会で思う存分に議論する自由などである。」[47]

このようにパルヴスは、すでにこの時点で、ロシア・ブルジョワジーの政治的反動性を察知していた。では、民主的憲法と真の自由を実現するためにはいかなる勢力をたのむか。

Machine Translated by Google

3. 革命像の模索

(1) プロレタリアートのヘゲモニー

確かに、民主的憲法と政治的自由の獲得は、その頃のロシアの革命運動の共通の目標となっていた。80年代後半、「人民の意志」党のテロリズムが鎮静化し、そのかわりにロシア・マルクス主義が勃興期を迎えるや、「政治的自由の確立」という当面の課題が、革命諸党派結合の接点として注目される観があったのである。そして当時の大勢は、その実現のために革命家とリベラルとの共闘を目指していた。プレハーノフも、90年の段階ではまだリベラル不信が強かったが、92年にはリベラルの飢饉救済活動に共鳴、彼らに社会主義者との連帯を呼びかけるようになる[46]。1893年夏にサラトフで結成された「人民の権利」党は、こうした動きの典型例だろう。同党は「政治的自由」の獲得のため古参社会主義者とブルジョアジーの進歩勢力の結集を唱えていた[47]。

以上のようなロシアでの動きからすれば、この点についてのパルヴスの主張はきわめて特徴的と言える。すなわち彼は、民主的憲法と自由を真剣に求めるのは労働者階級だけだと断言するのである。

「この階級は、自らを組織しうるために、資本の力に対抗するために、自由を獲得しなければならない。そしてこの階級は、民主的憲法を獲得しなければならない。なぜならこうしてのみ、彼らは政治的優位を保つからである。」パルヴスによれば、帝政までの経済的基盤をなす農民層の没落によって、国の経済力を握る資本家層に議会が従属するようになったという。資本家層に憲法が「与えられる」かどうかは、もっぱらこの階級の意志にかかっているというのである。

「彼らは支配的な資本主義との厳しい闘争に持ちこたえねばならないだろう。しかし勝利は彼らのものに相違ない！」[48]

パルヴスのかかる自信は、いかなる論拠に由来するものなのだろうか。80年代に「爆発的」に増加したとはいえ、依然として極少数のロシアの労働者階級に、そこまでの成長を期待できるのか。もちろん彼は、当時のロシアの労働者の悲惨な状態を認識していた。例えば農村からの出稼ぎ労働者が大半を占める炭鉱労働者の低賃金労働の実態を剔出し、またシベリア鉄道建設に従事する労働者の劣悪な労働環境については、その無制限の搾取ぶりをこう告発している。「飢えと衰弱した農民は、プロレタリア大衆を形成し、ロシア資本主義は彼らを使って本源的蓄積の術の蓄古を行なっているのだ。」[49]

こうした搾取の横行は、労働運動の未成熟の帰結であった。しかし、先進的なヨーロッパ・ロシアの西部諸県等では、その成長の徴候が散見できた。パルヴスはそこに、ロシアの労働運動の発展の可能性を託したのである。特に彼が期待をこめて語るのは、その意識の高さである。当地で開かれた1892年のメーデー集会での労働者の演説は、それを象徴するものだった。彼はその内容を詳細に紹介する。

すなわちその演説は、5月1日の意義、社会における階級対立の非和解性、資本主義衰滅の必然性を明らかにした。弁士は次いで、資本主義の下で苦しむ労働者階級が自らを解放するためには、組織が不可欠であることを強調し、その歴史的な模範である西欧の兄弟の運動・教訓に学ぶよう訴え

Machine Translated by Google

た。またそこでは、ユダヤ人問題、婦人問題は階級闘争に還元されるべきこと、憲法の獲得が労働者階級の闘争の第一歩となることが説かれ、さらに、ツァーリズム体制との闘争に生涯を捧げた先駆者たちへの称賛がなされたのだった[51]。

労働者階級の成長をめぐる論争の中で、その頃の演説を受けて、パルヴスは次の結論に到達する。「強力な革命勢力がツァーリズムに台頭してくるのは、ロシアでは労働者階級である。それゆえ労働者階級こそは、さしあたり政府との妥協を模索するであろう。階級意識を備えた労働者は妥協することなどできない。民主的憲法は、彼らにとって死活問題なのだ。そしてロシアの労働者は、絶対主義を打倒するために、労働者自身と全人類のために。」[52]

要するにパルヴスは、ロシアで民主的憲法と政治的自由を実現できるのはプロレタリアートだけであると再度強調しているのである。言い換えれば、ここにあるのは、ブロレタリア主体のブルジョア革命の構想だと解釈できよう。その成否は、プロレタリアの階級意識の成熟にかかっていた。すなわち彼は、1880年代半ばにようやく成立し、また超搾取の状況をひきずっているロシアの資本主義の後進性に比べて、ロシアのプロレタリアートの階級意識が不均等に発展している点にプロレタリアートこそロシアの「試金石」を主張する論拠を見出していたのだ。この認識は、革命の国際的連続性の見解と不可分だった[53]。

(2) 国際革命への期待

もっとも、パルヴスは、当面の課題をブロレタリア主体のブルジョア革命とする見方は、ロシアに限ったものではなく、一般的な考えとしてプレハーノフにも共通する思想であった。だが質量ともに脆弱なロシアのプロレタリアートだけでは、ツァーリズムを打倒することはできない。そこで問題となるのが、友軍につ いてである。プレハーノフは自由主義ブルジョアジーに、レーニンは農民に友軍を求めた。特に当時ロシアの多くのマルクス主義者の間で支配的だったレーニンの見解は、「歴史の法則」を強調し、プロレタリアートには、ブルジョアジーを権力の座につかせるよう、革命的にして自制的に行動することを期待していた。それぞれそれは、現実との全面的な対決の思想にはなりえていなかったと指摘される[54]。

しかしパルヴスは、西欧のプロレタリアートに友軍を求めることによって、現実の諸条件の中から革命の展望を見出そうとする。その突破口は、ロシアの大凶作に起因する西欧における階級闘争の激化にあった。つまり、ヨーロッパの穀倉の地位を占めてきたロシアは、1891-92年の大凶作により、穀物輸入国に転落しかねない状況に追い込まれていた。穀倉ロシアの破綻は、それまでロシアからの輸入に頼ってきたヨーロッパに何をもたらすのか。パルヴスはかかる視点から、ロシアの隣国ドイツの労働運動の将来を見据えるのだ。

「ドイツは穀物輸入なしにはやっていけない」とのパルヴスの言葉にあるように、その頃のドイツは相当量の穀物を輸入に頼っていた。もちろんロシアへの依存度は高く、小麦、ライ麦では85年の数値で実に5割強をロシアからの輸入で賄っていた。凶作によるロシアの穀物の途絶は、ドイ

Machine Translated by Google

いうにおよばず大打撃だ、とは言うまでもない。パルヴスはこの点に注目してる。それによれば、穀物の不足分は他国からの輸入で補えるものではない。「そのような状況下では、今後数年の間に大幅な穀物の値上がりは必至である。このことは、労働者と資本家の間で賃上げをめぐる闘争を促進せずにはおかないであろう。なぜなら、穀価の上昇は生活費の上昇に直結するゆえに、労働者は当然賃上げを要求することになる。一方、資本家にしてみれば、賃引き上げは商品価格の上昇にはねかえるわけにはいかないであろう。したがって、大量の産業予備軍の存在がこの闘争を資本家の方に有利にさせている[57]。

従って「労働者階級は厳しい闘争を目前に控えている。そしてそこでは、労働者の力は組織にのみ存する。ただし、労働組合的組織にとどまらず、政治的な結合された政治的労働組合的組織においてもだ。労働者階級が団結しさえすれば、どんな何が起こっても、労働者階級にさせる力は社会に存在しないのだ[58]」

つまり労働者の組織力は、労働組合と労働者党（「政治的労働組合的組織」は、労働者党を指すと考えられる）が保障するというわけである。パルヴスの説明では、前者は資本家個々に対する経済闘争を担い、後者は、個別の経済闘争では表出しきれない労働者階級全体の利益を、資本家階級に対置する政治的機能を備えるという[59]。そして両者の有機的結合こそ、労働者階級が「厳しい闘争」を乗りきる機軸であった。ここでとりわけ重要なのは、彼が組織労働者に寄せる絶大なる信頼である。それは、「革命的労働者に対するロマンティックな信念」と評されるほどであり[60]、この「信念」は、その後の彼の理論活動を大きく規定する動かぬ座標となってゆく。

例えばレーニンは、ロシアの革命運動の停滞の原因を、インテリゲンツィアに帰するのではなく、彼らの本来持つ力を革命へと転化できずに日常活動に埋没する党に帰そうとした[61]。また、「血の日曜日」の敗北については、労働者大衆が示した革命的エネルギーに対して党組織が不十分であったとの結果だと総括して「革命と組織せよ」と述べた[62]。そして、この組織労働者の神聖視とも言うべき「信念」は、彼の革命像にとっても、その国際的連関の媒介項の役割を果たすのである。かかる意識を前提としてこそ、後発資本主義国ロシアの労働者階級の台頭と、ロシアの大凶作に端を発したロシアにおける階級闘争の激化とは、国際革命という同一の視点で把握できよう。パルヴスは、革命の国際的連続性について次のように考えていた。

「ロシアの労働者階級は、全世界の団結という偉大で強力な鎖の一環として、その大きな強力な鎖の新たな環としてのみ現れるのであり、この鎖は断ち切ることのできるような力は地上には存在しない。そしておそらくロシアの資本主義が頂点に達すると同じ瞬間に、国際的な資本の力とロシアの資本主義の力は、すでに掘り崩されてしまっていることだろう。」[63]

先のプラハ・テーゼも、確かに革命の国際的関連を期待してはいたが、それを必然とはせず、基本的には一国を前提として「非連続的一段階革命論」を提起した[64]。しかしパルヴスの構想では、この関連は必須であった。彼のプロレタリア主導の革命の現実性は、国際革命の連鎖の中に認められ

Machine Translated by Google

The deep belief in the class consciousness of the proletariat in Russia and Western Europe
があったのである。それには、ロシアおよび西欧のプロレタリアートの階級意識に対する確たる信頼が伏在していた。

(3) Among the Social Democrats

(3) 革命諸派の交錯の中で

As mentioned above, in a series of articles in the early 1900s, Parvus wrote related theses and criticized the Russian Social Democratic Labor Party
既述の如く、パルヴスは90年代初頭の一連のロシア関連論文において、大衆運動による社会の動揺とそこから引き出される革命の展望を、レーニンの同志たちの前に明らかにしたのである。しかも彼が示した革命構想は、国際革命を志向しており、ドイツの同志たちにとっても無関係ではなかった。leading to this German comrades for revolution and the comrades in Germany
However, at that time, the German Social Democrats did not pay much attention to Russia
ただ、当時のドイツの社会主義者たちは、それほど大きな関心を露西亜に注いではいなかったと言ってよい。At that time, the revolutionary movement in Russia wasまた、その頃の彼らは、ロシアの革命運動はconsidered to be the most backward in Europe,ヨーロッパで最も遅れたものとみなしており、そRussia was therefore only peripherallyうゆえにロシアの政治闘争の周縁的存在にすぎなかった[65]。

On the other hand, the reality of the revolutionary movement did not realize the vision of Parvus
In the Russian Empire, where the leaders of the revolutionary movement could be said to be
the "People's Will" party, which followed this and the emergence of a
labor movement, which
led by Plekhanov took the "Labor Liberation"
Group, the "People's Will" faction criticized the "Labor Liberation" faction
for "Labor Liberation" group, however, with the
The SPD's legitimacy
一方、当時のロシアの革命運動の現実も、パルヴスの構想を実現するにはほど遠かった。すなわち、その指導的中心とも言うべき革命家たちは、すでに崩壊した「人民の意志」党の流れを汲むグループと、それに続いて台頭してきた労働者階級を基盤とする新興勢力「労働解放」団が、主導権を競っていたのである。「人民の意志」派は「労働解放」団を「分裂主義者」だとして批判し、「労働解放」団は、「人民の意志」党のかつての領袖ティホミーロフの転向（1888年8月）を嘲笑した。Engels, who was concerned about the conflict between the two factions, prepared for the coming Russian revolution
This is also because the Russian revolutionary movement was divided into two factions, and the unification of the two factions was
Kautsky and the SPD leadership shared the same opinion
For example, in the theoretical magazine "Neue Zeit" edited by Kautsky
While articles by
One notable example is that
The background of the SPD's attitude
Marx, who
Parvus criticized the people's will faction
SPD leaders' attitude
Although there are reports from Russia
SPD幹部は、晩年を迎えてもなおこうした両派の対立を憂慮し、来たるべきロシア革命に備えて統一戦線結成を切望していた。91-92年の飢饉は、彼に革命の間近なることを予感させたが、この願いは一層であった。エンゲルスがその調停工作にあたったことからもわかるように、SPD幹部も基本的には同じ願いを有していたのである[66]。それは彼らの両派に対する中立的態度にも現れている。その例として、カウツキー編集の理論誌『ノイエ・ツァイト』には両派の論稿が掲載されていたのに対し、ヴォルフ・ドゥルム編集の中央機関紙『フォアヴェルツ』は一派の寄稿に門戸を開いていたことが挙げられよう[67]。

SPDのかかる態度の背景には、ロシア帝国の解体を目指す運動であれば、それは党派を問わず無条件に支持するというマルクスの意識があった。西欧の社会主義者は、マルクスと同様に「全ロシアの反動の堡塁」たるツァーリズム観には同意していた。そして彼は、While studying in留学時代、he also founded両派の結合を目的に設立された「社会主義文献ボイト」（1887-1888年）に参加し、両派の争いをロシアの革命運動の障害とする立場にあった[68]。However, in the 1900s, he changed his position based on his analysis of the situation in Russiaしかし90年代になると、彼はロシアの情勢分析から、その立場を改め、SPDの中立的態度を是認するのである。彼から見れば、SPDは、プレハーノフの転向以来退潮著しい「人民の意志」派に寄せる期待は、現実を知らぬ無益な期待と映った。

Parvus criticized the People's Will faction by pointing out the growth of the labor movement in Russia
パルヴスは、ロシアにおける労働運動の成長を指摘することによって、「人民の意志」派を批判し、SPD幹部の態度の変更を促すのである。He urged the SPD leadership to change its attitude.それによれば、「全く聞き覚えのない報道がロシアからもたらされている」とはいうものの、これまでロシアに関する報道は、帝政の残虐行為、人民の悲惨な状態、

Machine Translated by Google

それに賃りを感じた人々の勇猛果敢な行動が一挙に相場が決まっていた。だが今や、労働者大衆の覚醒が伝えられるのである。それは、「全世界にとって教訓的な事例」に値する。しかし、「人民の意志」派の従来の見解では、この現実は捉えられない。すなわち彼らは、「所与の政治的条件の下ではロシアの労働運動は不可能であり、それゆえ人民のために政治的権利を闘い取ることは、インテリゲンツィアの課題だ」と主張してきたのである[69]。

そして、こうした「人民の意志」派の主張を、パルヴスは「人民のために」と称しながら、そこには人民が不在なのだ。人民とともにその全ての歴史において、あるいは人民不在のままで何かが作られうるかのようだ」と評した。それは、「人民の意志」派の革命論を「人民不在」の革命論だと批判したことに似ている。

パルヴスにしてみれば、彼が全幅の信頼を置く労働者階級がロシアで成長しつつある以上、その役割が「インテリゲンツィア」に代わるという見解は承服できなかったのだろう。彼は、今後は「労働解放」団と労働者階級が、ロシアの革命運動の主流となることを力説している。

「彼ら[「労働解放」団]が予見したことが起こっている。インテリゲンツィアは、ツァーリズムの自由を勝ち取れなかった。今や労働者が台頭している。あらゆる弾圧策にもかかわらず、労働者は台頭し、結集しつつあるのだ。」[72]

ロシアとドイツの革命諸派が交錯する中、パルヴスは上述のように自らの立場を鮮明にし、SPD、とりわけ「労働解放」団の存在や活躍を軽視し、「人民の意志」派に紙面を提供していた『ヴォルヴェルツ』編集部に、「労働解放」団がロシアの革命運動の中心勢力になりつつあることを強く印象づけたのである。彼のこの強力な推薦もあって、SPD幹部は「労働解放」団をロシアの代表だと認めるようになる。『ファールヴェルツ』にもプレハーノフの寄稿が掲載されるなり、92年12月にはついに、W.リープクネヒト宛てのプレハーノフの公開書簡が紙面を飾るに至る。パルヴスは、社会民主主義の勢力伸張をブルジョア民主主義の衰勢とみるロシアの現実にSPDの目を開かせたという点で、「ロシアとドイツの社会主義者の関係に対して初めての貢献をなした」[73]。

むすびにかえて

以上、1892年6月に発表された「ロシアの状態」とそれを補足する諸論文を中心にパルヴスの飢饉論の再構成を試みてきた。それを今一度要約すれば、パルヴスはロシアの大飢饉の根本原因を農業の資本主義化の遅れに帰し、従ってその最終的解決策は農業の資本家的生産方法への移行以外にないと断じた。そしてこの移行は、大飢饉によって促進され農民層の分解を一層加速させ、大量のプロレタリアートを創出するだろうとの予測を下す。ここから彼は、ロシアの資本主義の急速な発展を断定的に論じたのである。創出される豊富な労働力こそその裏づけであった。

このようにパルヴスは、ロシアの資本主義の発展を一国内部の自生的発展として把握するのであるが、革命の現実性については国際的視野で考えていた。その背後には、ロシアに対する不信感と、反面西欧のプロレタリアートに対する期待感が裏表一体をなしていたのである。

Machine Translated by Google

彼の革命論は、少数だが階級意識の高いロシアのプロレタリアートがまずブルジョア革命を担い、西欧のプロレタリアートがそれを支援するという構図だった。パルヴスのプロレタリアートに対する絶大なる信頼がかかる展望を可能にした。彼がSPD幹部に「労働解放」団を強く推したことも、この観点から理解できよう。

すなわち、青年期のパルヴスの議論には、早くも「労働者民主主義論」の基本的発想が荒削りな形ながら胚胎していたのである。それはレーニンが「1850年3月の中央委員会の同盟員への呼びかけ」に対して与えた評価、すなわち「マルクスの主導下の連続革命の構想」のロシア版とも呼ぶべきものだろう。そして彼の示唆する革命の現実性は、90年代後半、彼が没頭する世界市場に関する研究によって世界資本主義の情勢認識、特にその恐慌循環という側面から補強されることになる[7]。

しかしながら、その一方で、この時期のパルヴスの主張には、諸々の理論的未熟さも指摘できる。例えば、農民層の分解をめぐる誤認は、すでに触れたとおりであるが、彼の労働者階級に寄せる無制限とも思える理想も、批判を免れない。とりわけ彼がロシアのプロレタリアートの階級意識の昂揚として捉えたものは、実際には彼ら農民のような原初的な抵抗の噴出ではなかったのか。また、永続革命の視点から見れば、彼は革命の国際的連続性については言及しているが、その段階的連続性の位置づけは不明瞭なままである。それが明確化されるには、1905年を待たなければならない。

とはいえ、批判は多くあるが、ただ忘れてはならないのは、パルヴスがすでに20歳代半ばに、プロレタリアートの権力獲得を当面の現実的な課題として認識していたことである。終生変わらぬ彼の革命に対する基本姿勢がここにうかがわれる。彼にとって革命とは、座して待つものではなく、闘い取るものだった。

Note 注

1) Leopold H. Haimson, *The Russian Marxists and the Origins of Bolshevism* (Harvard UP, 1955), pp. 49–51.

2) Martov, *History of the Russian Social-Democratic Party* (Paris, 1926), p. 16. 加藤一郎訳『社会民主党史』（新泉社、1976年）16頁。

3) For the life of Parvus see Tim Merchant of the Revolution (Eurasia, 1971), translated by Schadlau, Zeman, Kuusta, and Kadokura. 生涯については、シャドラウ、ゼーマン、蔵田、門倉訳『革命の商人』（風媒社、1971年）を参照されたい。なお彼がParvusなる筆名を用いるのは、1894年以降であるが、本稿ではパルヴスで呼称を統一する。

4) Winfried B. Scharlau, *Parvus-Helphand als Theoretiker in der deutschen Sozialdemokratie und seine Rolle in der ersten russischen Revolution* (1867–1917), Phil. Diss., Münster (1960), S. 37.

5) 拙稿「第1次ロシア革命における S. パルヴス、レーニキ、トロツキー」『明治大学大学院紀要』第24集-3（1986年）。

6) Richard C. Robbins Jr., *Famine in Russia 1891–1892* (Columbia UP, 1975), p. 2, 185.

7) *Ibid.*, pp. 1–6.

8) 詳しくは、田中真晴『ロシアの経済思想史の研究』（ミネルヴァ書房、1967年）第7章。

9) Parvus, *Im Kampf um die Wahrheit* (Berlin, 1918), S. 8.

10) Konrad Haenisch, *Parvus Ein Blatt der Erinnerung* (Berlin, 1925), S. 8.

11) [Parvus], "Die Lage in Rußland I. Die nächste Ernte", *Vorwärts*, den 17. Juni 1892.

12) 田中真晴『ロシア農政史研究』（御茶の水書房、1966年）208頁。

13) [Parvus], a. a. O.

Machine Translated by Google

14) [Parvus], "Die Lage in Rußland II. Der Zusammenbruch des bäuerlichen Rußlands", *Vorwärts*, den 18. Juni 1892.

15) 菊地昌典『ロシア農奴解放の研究』（御茶の水書房、1964年）419頁。

16) Robbins, *op. cit.*, p. 6, 9.

17) [Parvus], a. a. O.

18) Robbins, *op. cit.*, p. 8.

19) C. Lehmann und Parvus, *Das Hungerjahr in Rußland* (Stuttgart, 1900), S. 535.

20) [Parvus], a. a. O.

21) ラ・ラーピン、菅原崇光訳『ロシアの資本主義化』（勁草書房、1977年）25頁、日南田、前掲書、204、208頁。

22) 菊地、前掲書、421頁。

23) [Parvus], a. a. O.

24) 小島定氏によれば、ブレハーノフは『われわれの意見の相違』（1885年）において、ロシア農村共同体の解体の必然性を「外的解体論」と「内的解体論」（土地の共同所有と経営の私的所有との内在的矛盾の把握）という二重の論理をもって説明した。しかし大飢饉に際して書かれた「全ロシアの破産」（1892年）では、飢饉の原因究明を通じて解体の契機を「租税の重圧」に求める「外的解体論」が前面に登場し、「内的解体論」は後景に追いやられている。小島定「ロシア・マルクス主義の飢饉論(一)」『商学論集』（福島大学）55巻1号（1986年）124頁、同「プレハーノフの飢饉論(二)」55巻2号、81頁、なおプレハーノフの「全ロシアの破産」を総覧した論文として、[Parvus], "Die Hungersnot in Rußland", *Neue Zeit*, 1891/92, Bd. 2, S. 485-486.

25) ヴァリツキ、日南田他訳『ロシア資本主義論争』（ネーブル書房、1975年）154頁。

26) [Parvus], "Die Lage in Rußland II. Der Zusammenbruch des bäuerlichen Rußlands".

27) [Parvus], "Die Hungersnot in Rußland", S. 494.

28) [Parvus], "Die Lage in Rußland II. Der Zusammenbruch des bäuerlichen Rußlands".

29) Ebenda.

30) 和田春樹「近代ロシアの発展構造(一)」『社会科学研究』17巻2号（1965年）160頁。

31) [Parvus], a. a. O.

32) Ebenda.

33) 高橋馨「初期プレハーノフの諸問題」『現代思想』（青土社）1976年11月号、230頁。

34) 詳しくは、渡辺寛『レーニンの農業理論』（御茶の水書房、1963年）95-136頁。

35) 前掲書、99頁。中村弘正『帝政ロシアと外国資本』（岩波書店、1988年）33、53頁。

36) 内田芳明「ツガン＝バラノフスキーとカウツキーの農民論」『法経論集 経済・経営篇』（愛知大学）111号（1986年）。

37) 彼は『階級闘争』（1911年）において、それまでの低い農民評価を改め、農民大衆と「ロシアの利害のつながり」、社会主義を準備すると述べるに至る。拙稿「レーニンの社会主義像」『外語大学院紀要』第25集3（1987年）129頁。

38) 内田、前掲書、80-81頁。

39) 菊地、前掲書、426頁。

40) [Parvus], "Die Lage in Rußland III. Das Zarentum", *Vorwärts*, den 19. Juni 1892.

41) 内田、前掲書、79-80頁。

42) [Parvus], a. a. O.

43) [Parvus], "Die Situation in Rußland", *Neue Zeit*, 1891/92, Bd. 2, S. 272.

44) [Parvus], "Der Schmerzensschrei eines russischen Reaktionär", *Neue Zeit*, 1891/92, Bd. 1, S. 568.

45) [Parvus], "Die Lage in Rußland III. Das Zarentum".

31

Machine Translated by Google

46) 佐々木照央「帝政ロシアの自由と飢饉」『ロシア史研究』36号（1982年）26-27、35頁。
47) Haimson, *op. cit.*, p. 50. 「人民の権利」党については、和田久雄「『人民の権利』党をめぐって」『スラヴ研究』No.32（1985年）。
48) [Parvus], a. a. O.
49) [Parvus], "Die Situation in Rußland", S. 270-271.
50) [Parvus], "Aus einem Lande der ursprünglicher Akkumulation (Sibirien)", *Neue Zeit*, 1893/94, Bd. 1, S. 247-249.
51) [Parvus], "Die Sozialdemokratie in Rußland", *Vorwärts*, den 23. September 1892.
52) Ebenda.
53) 後進国における基礎過程とプロレタリア階級意識の不均等的発展の認識は、トロツキーをも重視した点であり、この認識が永続革命論の礎石を提供したとされる。田中真晴、前掲書、64-65頁。
54) 同書、62-64頁。
55) 和田、前掲論文、151-152頁。
56) 中山、前掲書、32頁。
57) [Parvus], "Die Lage in Rußland IV. Folgen für Europa", *Vorwärts*, den 21. Juni 1892.
58) Ebenda.
59) Ebenda.
60) Scharlau, a. a. O., S. 166.
61) Парвус, "Война и революция IV. Самодержавие и реформы", *Искра*, №82, 1-го января 1905г.
62) Парвус, "Итоги и перспективы", *Искра*, №85, 27-го января 1905г.
63) [Parvus], "Die Lage in Rußland II. Zusammenbruch des bäuerlichen Rußlands".
64) 田中真晴、前掲書、56-57頁。
65) Peter Löscher, *Der Bolschewismus im Urteil der deutschen Sozialdemokratie 1903-1920* (Berlin, 1967), S. 20-21.
66) 和田春樹『Marx, Engels and Revolutionary Russia』（勁草書房、1975年）305-306頁。
67) 同書、289-290頁。
68) 佐々木照央「社会主義文献」『ロシア史研究』No.34（1980年）6頁。
69) [Parvus], "Die Sozialdemokratie in Rußland".
70) Ebenda.
71) 小島定、前掲「Plekhanov's Theory of Parvus」の飢饉論(一)115頁。
72) [Parvus], a. a. O.
73) Scharlau, ebenda, a. a. O., 前掲書、35頁。
74) これについては、茨路憲治「Parvus の後進国革命像」『未来社、1971年）53-61頁。
75) Winfried B. Scharlau, "Parvus und Trotzki 1904-1914. Ein Beitrag zur Theorie der permanenten Revolution", *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas*, vol. 10 (1962), S. 351-352.